

きちんとした印鑑書体でつくる印鑑で印鑑登録を

印鑑を作るということは、何か大事な場面が近付いていたり、記念に贈るものだったりいろいろな理由が出てきます。

その中でも実印登録するために、新たに印鑑を作るということも出てくるわけですが、価格もするものなので、いろいろと悩んだりします。

長年使っていくものでもありますから、印材などもしっかりしたものをと考えれば、それだけ価格が引きあがり、さらに悩みが増えます。

その印材とともに悩むことになるのが、印面に彫る印鑑書体になってきます。

どんなものでもいいのかといえば、そうはいえないものも多くあるわけです。

印鑑登録の際は、印面の文字化判別できるということが重要になってきます。

住民票が置いてある自治体に対して、自分の印鑑であるということで登録するわけですから、判別がつかないものを登録してしまっただけでは困ります。

そのため、極度に図案化されたものなどは、登録ができなくなっているわけですが、どの程度が極度かといえば、自治体によって違いが出ます。

印鑑に彫られる文字として使われる、書道でも使われる 6 つの印鑑書体であれば問題はありません。

登録時に判別する方も専門ですから、わかります。

ところが、勝手に作られて増えてしまった印鑑書体では、判別ができなくなる可能性が高いのです。

そのため、新たに実印を作ろうと思った際には、基本となる 6 つの印鑑書体の中から選ぶ必要があるのです。

それ以外の文字を入れてしまったりすれば、それだけ手間がかかったりすることになりますから、選んでしまった不運といえるわけなのです。

## オリジナルの印鑑書体

正式な場に押す印鑑もあれば、いろいろな手帳などに押す印鑑もあり、日本人の生活には印鑑やスタンプなどという小道具はなくてはならないものでもあるわけです。

そんな印鑑の中にはオリジナル性の高いものを使って、個人を主張するなどという遊び心のあるものもあります。

そういった印鑑であれば、印鑑書体はいろいろなものが使えます。

オリジナルということで、自分自身で考えてもいいわけですし、パソコンなどに入っているフォントで文字を刻むこともできるわけです。

そういったものは、正式な場に押すことはできませんが、個人商店などで宣伝に使ってもいいですし、今では当たり前になったオークションなどにおいて、落札者に対して一言つける場合に押す印鑑などとしても使えます。

こういったものがついていると、いろいろな思いが残りますし、また利用しようかなというきっかけにもなります。

相手に対して記憶を残すということは、リピーター獲得において最も大事な部分になるというのは、今の販売店会ではスタンダードな考えになっているのです。

そこで、こういったものも、インターネット店舗などで展開しているところでは製作してくれるところも増えました。

自分でデザインなども登校することができますので、その利用範囲はとてども広がっています。

こういった宣伝の小道具はただそろえただけでは、効果はありません。

どの場面でどうやって使うのか、有効な方法も考え発注することで、驚くべき効果を出してくれるものになるのです。

## 印鑑書体の大問題であるフォント

印鑑書体の中には、近年問題になってきているものがあります。

それはパソコンの内部で使うフォントです。

パソコンに取り込んだ段階から、変換などにも使える便利なものです。

なくてはならないもので、これがなくては表示もできません。

その中でも篆書体フォントと呼ばれるものがあります。

印鑑に使われたり、書道で使われる書体です。

篆書体は印鑑に彫られる文字としては最もメジャーなものであり、なくてはならない書体でもあります。

書道家が篆書体を使って書いた文字は、どれも同じ文字にはならないといわれ、印鑑のばあいには同一の文字が出来上がらないために、重宝されているわけです。

その篆書体がフォントになってしまったということは、この文字を機械彫りで使って行けることになり、大量の篆書体の印鑑が出来上がります。

ここまでなら指して問題にもならず、今まででもあったものなのですが、有名書道家の篆書体のフォントまで出てきたわけです。

そのため、印鑑に多くつかわれるようになっており、証明性を著しく下げてしまう恐れが出てきているのです。

これから先、印鑑登録に使われる印鑑でもこういったものが出回ることも予想され、とて

も危険性が高まってきているのです。

そうなった場合に、見事な印影だと思って手彫りと思い使っていたものが、実は機械で彫られたものであるようなことも出てくるために、きちんと手彫りだと確認できるような商品をおかくようにすることも、自分を守るために大切になってくるのです。

## 機械彫りと印鑑書体の今後の危険

篆書体は印鑑にはなくてはならない書体です。

書道でも篆書体の中の小篆は現役で使われているものであり、パスポートの表紙にも描かれていたりするものです。

とても大事な書体であり、大事なものになってきているわけですが、さまざまな問題も引き出すようになってしまいました。

こういった書体は、印鑑書体としてだけではなく、個人でも年賀状などに印刷できれば、とても情緒のある手紙が出来上がったりします。

何か大事なものに少し書き加えるだけでも、そういった効果があることから、パソコン用のフォントとして販売もされるようになりました。

その結果、安価で手に入るようになってきたせいで、印鑑の機械彫りにも使われるようになってきてしまったのです。

こういったフォントは販売されるものでもありますから、高名な書道家まで販売するようになってきました。

その結果、印鑑などでもどれが手彫りのもので、どれが機械彫りのものか、素人が見た程度では区別がつかないものまで出てきてしまっているのです。

印鑑は大事なものです。

なんでもいいものでもありませんし、同じものが出回っていいものでもありません。

工業製品的なものは安価なだけではなく、それに合った使い方が必要ですので、手彫りのものとは区別して使わなければいけません。

これから先は、印鑑を作る際にでも、手彫りや手仕上げで手書きをしているなどがきちんと証明できるところでの購入が必要な時代になってきていっているのです。

## 印鑑書体の基本である篆書体

印鑑には様々な書体が彫られ、印面が作られていくわけですが、この書体はなんでもいい

わけではありません。

かなり論争にもなったりするのですが、基本とする印鑑書体は6つであり、その基礎となっているのが篆書体になります。

古代中国で出来上がったといわれる書体で、直線的な文字が特徴です。

篆書体から隷書などへと展開していったことが知られてもいます。

その篆書体も、内部でいくつもの形に派生していった書体でもあるわけです。

現在、印鑑の印面や、書道などで使われているのは小篆と呼ばれる形になるのです。

こうやって成立してきた書体は、容易には崩さないというものになっています。

そのため、篆書体風の文字だとかいうものは存在しませんし、カタカナやひらがなも存在しません。

この当時存在していなかった文字に関しては、当て字で対応することが普通であって、字を作ってしまうなどということは禁忌といえるのです。

そのため、パソコンなどで使用しているフォントの中で小篆フォントなどは、高度なデザインの一部のものなのであり、本来の書とは全く違うものであると認識しておかなければいけないのです。

フォントの場合などは、うまく組み合わせなければ、存在しない字をあて時に書き換えることも難しいことですし、平仮名なども出せなければ利用価値がないからなのです。

こういった便利なフォントも、印鑑では弊害が生まれ始めています。

パソコンで使えるために、機械彫りなどでも利用されており、違う店で買った印にもかかわらず同じ印面が出来上がってしまうなど、今後機械彫りということをきちんと判別しなければいけない時代が来てしまうのです。

## なかなか見ることが無くなってしまった隷書体と印鑑書体

漢字の書体というものは、いくつか存在しています。

そういったものを利用して、書道も成り立っていますし印鑑書体とも利用しています。

印鑑の印面に彫られる書体は、書道が基本になっているからでもあるのです。

その書体の一つである隷書体は、篆書体を簡潔化することによって生まれたといわれています。

左右の払いが特徴的な隷書体は、横長になるのが特徴ともいえます。

これは、書を残すものが木簡の時代であり、木目が横に入っている柾目を使っていたために、負担が少ないように横長になったといわれています。

端正でバランスがよく、はね方にも特徴がある、とても読みやすい書体でもあります。

こういった可読性が高い書体を印鑑に使うということは、一見まねされやすいのではないかと、複製されてしまうのではないかと心配する向きもあります。

ですが、手書きで書かれた隷書体などを、手書きで複製することはほぼ不可能といえますし、手彫りで彫っていけば、まずあり得ない話なのです。

とても実用的な字でもあるわけですが、現在の書道ではなかなか習わない書体でもありません。

かなりの上級にならないと出てこない書体でもあるのですが、横長なことから生理的に描きやすいといわれ楷書などよりもずっと書きやすい書体とも言われているのです。

こういった書体を印鑑に用いると、詳しい人が見たときに、感嘆の域を漏らすかもしれません。

それぐらいのまい人の隷書体は、見事な文字になるのです。

#### 流れるようで優雅な印鑑書体の草書体

漢字の書体というものは、日本が発祥のものではなく、ほとんどが中国で発祥したのになります。

その中でも、そう書体は、中国の唐代で発展した書体になります。

印鑑にも使われることがある書体ですが、扱っているところは意外と少なかったりもします。

早く書くことを考えて作られた文字になるのですが、早く書くがために省略される部分があり、文字ごとに独特の省略方法をとるため、それぞれを覚えられない限りうまく使っていくことができません。

そして、書かによっても違いがあったりするため、一つの文字でも幾通りかの書き方が出来上がってしまうことがあったりもするわけです。

そう書体といえば、文字を続けて崩していくということがありますが、初期のころは一字ずつ崩していたのであり、これが発展して連続で崩すようになっていったのです。

この草書体の草という文字には、下書きという意味もあり、早く書くだけではなく他の書体の下書きにも使われていた可能性があるわけです。

この草書体を整えたものが行書体であり、あまり大きな区別がないのですが、大きく省略するものを草書体と呼んだり、少ないものを行書と呼んだりしているのです。

印鑑書体としての草書体は、とても美しく流れる文字になり、印影はとても美しく女性的なイメージすら持ちます。

省略があるために、読みにくさがあったりもしますが、実印登録などでも問題はありませぬし、印鑑として複製されにくい書体でもあるといえるのです。

印鑑書体としても実用性が高い行書体

印鑑書体として、草書体は流れるようで優雅な印象もあり、女性にも向く書体ではありません。

ですが、文字の省略など独特な用法が存在するために、文字ごとの省略方法などを知らなければ読むことが難しい書体でもあるわけです。

可読性ということを考えれば、草書体はかなり難があるといえるわけです。

そこで、きちんと書かれる楷書体と、省略しながらでも流れるような線を持つ草書体の中間として行書体が存在するわけです。

篆書体の走り書きから生まれたとされています。

草書体ほどではないのですが、速記に向くともされており、さらには草書のように文字ごとの省略を知らなくても読むことができる利点があるわけです。

そのため、漢字さえ知っていれば、速記したものであっても誰にでも読むことができるものなのです。

この行書体は、書道も筆記体としても浸透しており、中学校などでは書道として行書体を習うことになっています。

ここでは、筆順の逆転や省略法などを習うため、日本人にもなじみが深い書体になっているものなのです。

印鑑としても、草書体ほど難読ではなく、読める範囲での省略のため、実印にとっても向いている書体でもあります。

実印に使える書体ですから銀行印にも向いている書体であり、そういった点では印鑑書体として万能な書体ともいえるわけです。

年賀状などでよく登場することのある行書体ではありますが、機械彫りの格安の印鑑でも見かけることもあり、それだけ生活の中に密着してきた書体にもなるわけです。

印鑑書体の中でも認印に適している古印体

印鑑書体というものは、いろいろあるものではありますが、ほとんどは中国で誕生した漢字の書体がルーツになっています。

書道で使う書体が基本になっており、簡単に崩したり、派生させたりするようなものではありません。

そんな印鑑書体の中でも、日本で生まれたといわれているのが、古印体になります。そのルーツは大和古印と呼ばれる、奈良時代に合った寺社印になるといわれています。鑄造した印鑑にある文字を基本としているといわれ、鑄造に使っていた同が流れ込まずかすれたような跡があったりしたために、それをまねて作られているといわれているのです。そのため独特の風合いがあり、奥深い書体となっているわけです。その事態の基本は隷書体になっているため、文字のバランスも良く風合いがある書体として出来上がるというわけです。しっかりした文字になってくるため可読性がとても高く、独特の丸みなどがつくことから、銀行印に使われることも多くあります。ただし、機械彫りのフォントとしても応用されていることから、既製品の認印などにも多くみられるのです。可読性が高いということは、認印に使った場合にでも、他の相手に対して判を押したのはだれなのかということがはっきりと伝わります。難読なものを認印に使ってしまうと、こういった流れができなくなり、誰だかわからないが押しであるといった、本来の意味を喪失してしまうことになってしまうのです。印鑑の種類によって使い分けるといことは、とても大事なことなのです。

#### ほんとはあやしい、印鑑書体の印相体

篆書体は印鑑書体としてだけではなく、書道の世界においても重要な書体になってきます。漢字の書体として、とても重要な意味を持ち、篆書体内部でも派生していったほどの書体なのです。書道の中で、規制の書体を勝手に崩して新たな書体などを出すことは、よいこととはされてきていません。そういったことを認めるべきだという風潮もありますが、こういったことをすすめてしまえば、文字自体が分からないものがどんどん出来上がってしまい、結果的に書体の世界として迷走するだけの結果となってしまいますからです。印鑑書体は、書道で使われるものを基本とします。そのため素晴らし印影を残せるものとなるわけです。正式な場で使うような印鑑ではなく、遊び心があふれた印鑑や、会社のロゴなどを入れたスタンプなどであれば、さまざまなフォントや字体を駆使してデザインを勧めていきます。それは、見せるということが重要なのであって、認識や区別といったことではないからです。開運印鑑などに彫られる書体として、印相体などがあります。

説明書きをみると篆書体を基本として派生したなどと書かれますが、新たな派生文字を生み出すことは書道では許されませんし、歓迎もされません。

どこで派生してきたのかもわからない書体だったりするのです。

さらに占いを足しているというだけで、こういった印鑑書体は正式な場に使う印鑑ではなく、用法を無視したデザインの延長でしかなくなってしまうのです。

人生の中で大切な場面に使う印鑑です。

きちんとしたものを使うことは、意味もなく崩すこととはまったく違い話なのです。

### 実印を作る場合にあってはいる印鑑書体

人生の中で、印鑑を使う機会はかなり訪れます。

その中でも実印を使うとすれば、とても大事な場面となり、認印を押すこととは全く違う意味を持つ場面なのです。

そんな場面に使う実印は、相手もいる場で使うものになってきますので、とても目につくものになります。

さらに、実印として登録もしてあるはずですし、印鑑証明書もつけなければならないわけですから、その印影はとても目につくわけです。

そう考えた場合に、実印の書体はとても気になるものだということになってきます。

実印に合う書体と考えた場合に、基本とされる6つの書体のうちどれが合うのだろうかとなってくるわけです。

実印を作るとなれば、印材ともども安くは上がらないものです。

その金額もまちまちではありますが、認印などに使われる三文判の値段とは比べ物にならないわけです。

その場合、しっかりとした印鑑書体を選択したいと思うのは、当然の考えなのです。

一番わかりやすく適していると思われる書体は、古くから印鑑に使われてきた篆書体になります。

同じ人間が書いても、同じ書体にはならないといわれている書体であり、とても実印に向いています。

行書体や草書体も実印には向いています。

その理由はやはり、可読性はあるものの文字の省略などがあり、複製が難しいということが重要になってくるからなのです。

実印は複製されるような機械彫りでは危険です。

そういった同型印が作りにくい書体で彫って作り上げることが大切になってくるわけなのです。



印鑑書体として銀行印に合うものは何か

印鑑の書体は、難読になっていればいいというものではありません。

捺印する相手に対して、これはだれの印なのかということが分からないようでは、小笑みにもなりませんし、区別もつきません。

ある程度の可読性を持って、複製されにくい書体であるということが大切になってくるものなのです。

銀行印などは、資産を預ける銀行口座と直結する大事なものです。

その印鑑は、複製されてしまったりすれば一大事ですし、同じ印影のものが出回ることも危険です。

自分の銀行印が、そういったことに使われていると考えたら、銀行にお金な度預け入れられなくなってしまうわけです。

そこで、実印と同様の、可読性はあるが複製されにくく同型印が生まれないような書体というものが、銀行印には合っていると見えるわけです。

篆書体などは、実印のみならず、銀行印などでも活躍できる書体です。

直線が多く使われた書体ではありますが、その線からも同型印が生まれる可能性がとても低く、印鑑に最も向いているといえるわけです。

行書体や草書体も同じ意味があります。

可読性は最低限あるものの、まねしにくいその線は、銀行という大事なものに対しても効果があるわけです。

印鑑にとって書体は顔にあたる部分ともいえます。

その書体が印影となり、大事な書類などに残るわけですから、同じ顔の人間が複数いたら自分の代わりをされるかもしれませんし、相手から信用を得られないかもしれません。

銀行印だからと甘く見ることなく、しっかりとした書体で作りたいものなのです。

ビジネスの場で多く使う認印の印鑑書体

ビジネスの場で生きていけば、どんなに IT 化が進んだとしても、書類の重要性は身にしみるほどわかるものです。

その書類も、一人で眺めているようでは、書類としての機能を発揮できないわけですから、皆で確認したり内容を吟味したりするわけです。

そういった場面で、確認したことを知らしめるものとして、認印があるわけです。認印というものは、あまり印材などを気にして作るものではないともいわれます。100円均一で売っている、ラクトカゼインなどの三文判ですます人もいますし、効率を考慮してシャチハタの印鑑などを使う方もいます。こういった使い方もありますが、いつもスーツなどを着て仕事をしていると、なかなか築かれないところで自己主張をしたりするわけです。そこで認印などに彫る印鑑書体などに、自分の色を出したりする人もいるのです。特に出世していくと、三文判などで認印を押すのではなく、それなりの威厳が出るものを選択したりもするわけです。認印には古印体などはとても適しています。連続で使用することも多いことから、文字は太めのほうが欠けにくいということもあり、しっかりした書体である古印体は向いているわけです。そういった耐久性からではなく、認印というものの性格上、押したのがだれかという可読性から考えれば、楷書体はとてもぴったりきます。印影が美しい書体でもあり、可読性もとても高く、実印にはあまり向きませんが、認印となればかなり適している書体といえるのです。

#### 印鑑書体としては使わないゴシック体も使い方次第

印鑑書体といえば、使われる書体はある程度決まっているものでもあります。それは書道から発展してきている印鑑である以上、書道で使われない書体はあまり印鑑に適しているとは言えないからです。ですが、世の中には様々な書体が存在し、パソコンの中などにはフォント情報として、多くの書体を取り込まれているものなのです。その中でもゴシック体といえばとても有名な書体です。線の太さが均等であり、全く飾りのない書体で、見出しなどで多くつかわれるわけですが、小説などでは決して使われることのない書体です。コンピュータの世界では、最もメジャーな書体ともいわれ、さまざまな派生形まで生まれました。そのゴシック体は印鑑には最も似合わない書体かもしれません。線の太さが一定のため、同型印が生まれやすく、手仕上げや手彫りの意味がないからでもあります。ところが、スタンプやロゴマークともなれば話は別になってきます。とても見やすく強調感が強いフォントであるゴシック体は、ロゴなどに多くつかわれたり

するものです。

線が一定のせいでとても見やすくできますし、しっかりと相手に伝わります。

機械彫りの場合は、フォントとして格納しているものも多く、対応が早いともいえるわけ  
です。

印鑑やスタンプも使い方次第です、

実印などとは違い、宣伝的要素のあるものとかであれば、格式などにこだわる必要もない  
ことから、印鑑書体ももっと柔軟的に考え使っていくことも必要になってくるのです。

## 印鑑書体を手仕上げで上げるということ

印鑑というものは、様々な書体が彫られ、その印影を残すことで効果が出てきます。

そのため印鑑書体は大切なもので、命のようなものです。

ですが、その書面を彫るのは印材であり、印材によっては手彫りすることができないもの  
もあります。

手彫りは印刀という彫刻刀で彫り進めていくわけですが。

文字入れから仕上げまで、すべて手作業で行っていくため、腕の違いがはっきり出ますし、  
機械などによる時間短縮はありませんので時間もかかります。

その印刀が使えない相手には、手仕上げという手法になっていくわけですが。

古くからある印材であれば、機械がなかった以上、手で彫れる印材になるわけですが。

そういったものであれば古くから手彫りの印鑑なども残っており、見事な印影を残してい  
るものも多くあります。

最近では強度の高い金属を使った印材も多く出てきているため、手仕上げという手法が出  
てきているわけなのです。

手仕上げとは、文字は手書きで書き入れます。

そのため、同型印は出ないようにするため、実印などでも使えるものにはなりません。

書き入れた文字は機械で彫ります。

そのためでき上がりまでの時間がとても速く、生産効率も上がっているわけですが。

その後細かなところは手で仕上げていくわけですが、やはり手彫りとはでき上がりが変わ  
ってきます。

最近では、即日発送できるインターネット店舗などが増えてきましたが、こういった店舗で  
は手彫りではなく、素早く対応ができる手仕上げで彫られているものなのです。

## 高級印材では手彫りの印鑑書体

印鑑を作る上で、どんな手法で作っていくかということは、でき上がりの印影にかかわる大事なことです。

素材によっては、できる方法できない方法がありますが、高級印材などではぜひ手彫りで作りたいものです。

手彫りとは、機械などを使わず、すべて手作業で仕上げることを言います。

一切機械を使わないというところがポイントであり、どんなものであっても機械を使ったものは、手彫りとは言わないわけです。

これは公正取引委員会の指導のもと全日本印章業組合が定めたものであり、これ以外の表現は禁止されているわけです。

ですが紛らわしいこともあり、完全手彫りなどという表現も出てきているわけです。

これを確認する方法は実は少ないのが現状です。

一番大切なことは、信頼できる店舗で頼むことになるわけですが、手彫りと手仕上げは見た目ではとてもわかりにくいものになってしまいます。

そこで工程写真をつけてもらう方法があります。

作業に関して写真を撮ってもらうだけのことから、さほど難しいことではありません、インターネット店舗などを運営しているところであれば、手彫りの工程をとることも、添付してメールなどでおくってもらうことも難しいはずはありませんので、手彫りが心配な場合は問い合わせしてみることも大切です。

手仕上げは手仕上げの良さがあります。

手彫りでできないような硬い印材であっても加工ができます。

そのため耐久性の高い印鑑を作り出すこともできるからなのです。

## 同型印の印鑑書体が問題を起こす

三文判などは大量生産で作られる印鑑になります。

とても高速で作れるために、価格は安く作れますので、認印などにはとてもありがたい商品になります。

ただし、同型印と呼ばれるものが大量にできるところには問題があります。

同型印とは、印鑑書体が共通で、まったく同じものを指します。

これは機械彫りの場合、パソコンの中に書体であるフォントを入れ、それを機械が判断して彫り進めます。

そのため、そのフォントを手に入れば、誰でも同じ印鑑を作り出すことが可能になるか

からです。

これは複製ではなく、フォント得押利用しているからこそ起きる問題になるわけです。

同型印の危険は、実印や銀行印で起きます。

自分だけを証明するはずの印影が、他の人も持っているとするならば、自分自身を証明することができなくなるからです。

そうなれば、印鑑というものの自体の意味が消失してしまうわけです。

最近では印鑑書体として篆書体のフォントが利用されたりしています。

このフォントも、機械的に生産されたものであればまだいいのですが、高名な書道家の作品がフォントになっていたりするわけです。

それが知らず知らずの間に使われ、機械彫りであることも知らずに手に入れていたりすると、違う店舗で頼んだ印鑑が、実は印影が同じであるなどということも引き起こす可能性が出てきているのです。

同型印があるということを知っているということと、知らないで同型印が存在するということは問題として全く違うものです。

実印などを作る場合には、信頼できる店舗に依頼することが自分を守る時代になっていくのです。

## 印鑑書体を生かすあたり

職人が彫る印鑑書体というものは、上下きちんとそろって初めて美しい印影といえます。

変に斜めになって押印されたりすれば、綺麗な印影にもならないわけですから、印鑑書体を生かすためにも大事なことです。

この上下をしっかりとするために、印鑑には印材にあたりというものが彫られます。

印鑑を使って印を押すということは、その状態ではどこが上かは分からないわけです。

印面をのぞかなくても、上ははっきりわかりますから、綺麗に押すことができるようになっている工夫なのです。

本来、古くからある印鑑にはこういった工夫が必ずあったのですが、運勢が悪くなるなどの機能とは全く関係ない理由でつけない人も増えたわけです。

ですが、綺麗に印影を残さなければ、印鑑としての機能は半減します。

どんなにきれいな印鑑書体を入れたとしても、それでは意味がなくなるわけです。

そのため、作る側から考えても、ぜひ入れてもらいたいものでもあるわけです。

そのあたりのほかにも上下を判断できるようにするものに、丹があります。

印材に宝石などで上下を判断できるものを入れたり、つけたりするものですが、印材の色や材質を考えて入れることで、見た目にもとても美しい印鑑にもなってきます。

印鑑はあくまでも実用品である以上、しっかりとした機能が発揮できなければ意味がありません。

古くから作られてきた印鑑には、こういったものが付いています。

それで不幸になったという話は、誰もが聞いたこともないはずなのです。

## 遊び心を持ったたのしい印鑑書体

印鑑書体にはきまった形があり、その形を勝手にいじるものではありません。

何も考えずに新たな書体などを生み出しても、洗練されていませんし、読めないものまで出てきます。

模倣は模倣でしかないために、大したもの出来上がらないものです。

ですが、オリジナル性を高めたデザインであれば話は別です。

実印などでは登録することは難しくても、様々な遊び心が入っているものなど、入り口なものが作れるわけです。

そういったものを作るのも、印鑑の楽しみ方の一つでもあるわけです。

たとえば近年、絵手紙などを書かれる人が増えました。

正式な落款印には、形がありますが、そこまでこだわらずに遊び心を持ったたのしい印などを押すことで、絵手紙の中にアクセントを与え、締めることができるようになります。

空間をどう生かすかということでは、小さな空間の中に書き込んでいくわけですから、バランスが重要です。

特に何も書きこまない、白い部分のバランスというのが、絵手紙では重要になってくるため、そのバランスを引き締めてくれるのに落款印を使ったりするわけです。

その印には形はいりません。

アルファベットで和風に作ってみても面白いですし、逆に英語のフォントのようなものを平仮名に生かしてみるも面白いものです。

印鑑は道具です。

どうやって生かすかを考えれば、その可能性は無限に広がっていきます。

格式が必要などころにはしっかりしたものを、崩すものにはたのしい遊び心を入れてあげることも使い方としては大切なのです。

## 素朴な印鑑に彫られる印鑑書体

印鑑といえば、高級印材を使い、優れた書で印面を形どって、優れた彫り方をすれば、芸術品のようなものが出来上がります。

洗練されたものには、洗練された味があり、独特の風合いを持つわけですが、その洗練差とは逆にあるのが、素朴さでもあります。

印材といえば、象牙であったりもしますし、柘なども有名です。

価格もそれなりにしていきますし、希少価値のあるものであれば、かなりの金額にもなるわけですね。

そうなれば釣り合うような書体が欲しくもなるのは当然です。

ですが、印鑑といえばそういったものだけではありません。

彫れるものがあれば、どんなものでも文字などを刻み、印鑑として成り立ちます。

実印として使うものだけが印鑑ではないからです。

中でも桜の枝や、リンゴの枝などで作られた素朴な印鑑があります。

印鑑書体としても高名な書体などではなく、自由に描かれた平仮名などが似合う印鑑が出来上がります。

こういったものは、高級印材には出せない素朴さがにじみ出てくるわけですね。

なかなかこういった印鑑を作れる人も少ないですが、きっかけさえあればぜひとも見てもらいたいものでもあります。

こういった印材で作られた印影は、手彫りの中でも独特になります。

実印としてはあまり向いているとは言えませんが、銀行印としては使えるところも多くあります。

印影のサイズや文字の問題などがありますので、使用する場合には口座開設の際に確認してみることも大切なのです。

## 印刀を使って彫りこんでいく印鑑書体

印鑑の印材といえば、木材や象牙などの動物性のものが有名です。

こういったものに、印鑑書体を彫りこんで印鑑は出来上がります。

そのためにはいい書体が書かれなければいけませんし、印刀で刻んでいく際にはその腕がとてもしっかり出てきます。

手彫りの場合、文字を書き入れるのも手作業です。文字一つ一つに至るまで印刀で刻んでいきます。

機械などは一切いれずに、すべてが手作業になってくるわけですが、その時に使う道具が印刀です。

この印刀の使い方によって、いいものも彫れますし、悪いものにも変わってしまうものな

のです。

複数の印刀を使って、文字や状況に合わせ彫りこんでいきます。

そのため、手彫り印鑑では相手の強度が高すぎれば、印刀は使えずに手仕上げなり機械彫りになってくるわけです。

ですが、印鑑にできるような石材などであれば、硬度の高い石材用の印刀を使うことによって、印鑑書体を彫りこんでいくこともできます。

世の中で使われている印鑑は、現在私たちが普段から目にする印材だけではありません。

どんな印材であっても、文字を刻み、朱肉などをつけ押せば、それはもう立派な印鑑だといえます。

石材の印も、昔から中国では存在しますし、今でも使っている人もいます。

印鑑書体なども含め完成度には違いがあります。

古来の方法にのっとり作るものもあれば、楽しみも含めいろいろな用途などを考え作るものもあります。

そういったものも大事な印鑑には違いはありません。

### 三文判に使われる印鑑書体

三文判などは、普段認印などに使うにはとても便利なものです。

特に社内の書類の確認などであれば、確認以上の意味はないために、こういった安い判子で十分機能を果たせるものになるわけです。

印影のできなどよりも、誰が推したのかということが大事なために、こういった形になるわけです。

このような三文判などにつかわれる印鑑書体は、ほとんどが古印体です。

その理由のほとんどは、印鑑らしく見えるということがあります。

楷書体のものなのでも多く存在しますが、シャチハタなどに多くつかわれているだけではなく、教科書などにも使われる書体であるために、印鑑という印象が薄いということがあります。

それに比べ古印体であれば、

なんとなく印鑑のように見えることがあるわけです。

虫食いや筆の払いのようなつながり方などの加工は、本来鋳造で作ることを意識して加工されてきた技術の賜物であり、らしく見せることで出来上がったものではありません。

そのため、なんとなく作られた古印体はらしく見えるものの、手彫りの古印体に比べれば頼りないものに映ったりするわけです。

ですが、三文判の存在は、私たちの生活に、手軽で使える印鑑として恩恵を与えてくれる



ものでもあります。

どうやって使っていくかが重要なのであり、印鑑書体はそれなりに見れるもので可読性が高いものあれば問題がないものでもあるのです。

その代わりに、正式な場にはこういった印鑑を用いて捺印することは、避けなければいけない礼儀でもあるのです。

アルファベットの印鑑書体はどれが合うのか

印鑑の中には、アルファベットで彫る場合があります。

印鑑書体は、中国で出来上がったものが基本になっているため、漢字の書体です。

平仮名もありませんしカタカナも存在しません。

こういった書体になるだろうということで作られていたりするわけです。

ですが、銀行印などの場合、外国の方が銀行口座を開けようとするならば、本人確認ができるものとして必要になるわけです。

そこでアルファベットなどを入れることになるわけですが、古来からあるような印鑑書体ではうまく出来上がらないわけです。

無理やりこじつけて作ることはできますが、おさまりはいいとは言えません。

そこでもともとアルファベットで使われるような書体を持つてくることもできますし、印刷用の書体として使われるゴシック体などを用いて作ることもあります。

面白いところであれば、外国の方が日本の文化の一つとして高く評価している歌舞伎の看板の文字として古くからある、勘亭流などを利用して作ることもあります。

突きつめればアルファベットで印鑑を作ることも、邪道でしかないのかもしれませんが。

守るべき文化は、後世に対しても守らなければいけないものでもあります。

しかし、時代は流れ世界の中で生きていくために、変わっていくことも必要でもあるわけです。

こういった印鑑も一つのあり方として、考えていかなければいけない課題にもなっているのです。

堅苦しいことも必要ではありますが、遊び心を持って作る印鑑としては、人々が楽しめるものとして大いに広がってもいいのではないのでしょうか。

デザイン化された印鑑書体も印鑑の楽しみ

ものには正式な場で使っていくものと、もっと砕けた場で使うものがあります。  
なんでもケースバイケースなのであり、時と場合に合わせ変えていくことで、古くからある格式を壊さずに楽しむこともできるようになっているわけです。  
印鑑もそういった文化の中の一つであり、正式な場で使う実印や銀行印もありますし、もっと砕けて手紙などに押してみる落款のようなものもあります。  
落款であっても形式が存在し、どこまで崩すのかということはまた議論になったりもします。  
そのために使われる書体にも決まりがありますし、正式なものに対して印鑑書体を勝手に造作してよいかといえ、それは間違いであるといえるわけです。  
ですが、もっと遊びを持って作るものも出てきても、それもまたおもしろいものであり印鑑なのではないでしょうか。  
その中にはスタンプのようにデザインを楽しんで作るものもあります。  
特に年賀状に押される干支のスタンプなどは、干支の文字をもじって図案化して作られたりする楽しいものでもあります。  
もともとは書の世界でも、文字には意味が存在することから、意味を考え書くことは大切なこととなります。  
その派生でもある文字の遊びは、日本人が小さいころから慣れ親しんで描くものでもあるわけです。  
何事も格式や伝統は大切です。  
印鑑書体の形を守り、いい加減なものを使わないことも、大切なことです。  
そういったものを守りながら、新たな形を想像していくことも、大切で楽しいことではないでしょうか。

#### 印鑑書体としての勘亭流の楽しみ方

印鑑というものを考えたときに、印鑑書体は印影を作るためにも重要なものになります。  
印鑑書体が入っていないければ、何が書かれているか文字では伝わらないわけですから、なくてはならないわけです。  
ですが、デザイン性の高い文字などを使って、普段使うような印鑑の用途ではなく、千社札のようなものを作る判子もあるわけです。  
そんな場合には、歌舞伎の看板に使われるような文字で刻まれることもあるわけです。  
そんな印鑑文字には江戸文字と呼ばれるものを使ったりします。  
有名などころでは勘亭流と呼ばれる書体があります。

歌舞伎の看板や相撲の番付などに用いられる文字で、岡崎屋勘六が18世紀に作りだした文字だといわれています。

狂言の台本などにも使われる文字で、独特のつなぎ方をする特徴のある書体なのです。

このような書体は、実印には用いられることはごくまれです。

その代わりに、外国の方の銀行印に漢字を当て字とした場合に使われたりすることがあります。

他にもショップ用の印鑑などに用いて宣伝用にも使われますし、スタンプに入れることもあるわけです。

使用用途さえ間違わなければ、誰かに迷惑をかけることもなく、楽しんで使える印鑑も作ることができるのです。

レジュメなどに製作者の印として、こういった洒落のあるものが入っていれば、ぱっと眼をひくものにもなりますし、自分の持ち物に押しもはつきりと自分のものだとは認識できるものに変えてくれるわけです。

#### 落款印の印鑑書体の決まりと自由な発想

落款などを作る場合には、印鑑書体を気にして作る場合と、さほど気にせず図案化して入れる場合があります。

いくつか使い方にも形があり、そこに彫られる文字にも種類があるわけです。

たとえば関防印といって書き始めを意味する長方形の印があります。

中にはめでたい言葉や自戒の語句などが彫られるわけですが、篆書体で彫られることが一般的です。

さらに氏名印である白文印と雅号である朱文印を縦に並べて押すことになります。

間違っても朱文印が白文印の上にくることはありません。

これらの印は行書体、古印体、篆書体のどれかを選択するものになります。

ですが、ここまで格式にこだわらなくても、絵手紙などであればもっと楽しんだ落款印を作って押すこともいいものです。

自分の名前を入れてもいいですし、雅号などを作って入れるのも楽しいものです。

ですが、こういった楽しみの部分がある落款なので、印鑑書体としてもゴシック体など印刷用の文字では面白みもありませんので、手書きで書いた文字を入れてみたり、江戸文字のようなちょっとしゃれのきいた文字を入れてみるのも楽しいわけです。

印鑑も格式はありますが、使い方次第で生きもしますし、死にもします。

堅苦しく縛られなくても、どれぐらい作品とマッチするのか、空間を生かせるのか、自分というものの主張はどこまでするのか、そういったことまで考えて作っていけば、楽しく

自由度があってもしっかりと落款の意味を果たしたものが出来上がるはずです。

## 千社札に描かれている書体とスタンプで楽しむ印鑑書体

昔から日本の文化として、寺社信仰とともに使われてきたものに千社札があります。

今では、ゲームセンターなどでも気軽に作れるものになってきていますが、本来は神社仏閣に対して納札するためのものです。

模様と名前を入れた貼札とも呼ばれる題名札と、カラフルでデザインも美しい色札とも呼ばれる交換納札があるわけです。

この貼札を貼るのは、宿に泊ってまで参拝しなくても、その御利益が得られるようにするためといわれています。

そのためには社寺仏閣が持っている御朱印を朱印帳にもらい、どこに貼ったらいいのか許可を得てはじめて貼るものになっています。

許可もなしにどこでも貼っていいかといえば、そうではないものなのです。

この千社札には、江戸文字の籠文字が描かれています。

木版画で刷られるものになるのですが、こういった千社札風のものを作るスタンプも作れるようになりました。

そこに使われる印鑑書体に関しても、この籠文字が再現されてるわけです。

こういった再現性があるからこそ、楽しいスタンプとしても使えますし、遺物などにちょっと押しておくだけでも自分のものだというアピールにもつながります。

スタンプも印鑑もしっかりした書体などを用いて作ったりしますが、こういった楽しみで作るものもあるわけです。

千社札はしっかりとルールを守って使わなければいけません、自分の私物に対してなら、楽しんだり遊びを持ったりしながら使う、こういったスタンプも楽しいものになるわけです。

## 会社にとって重要な法人実印に彫る印鑑書体

会社を設立しようと思った場合に、やらなければいけないことが山ほどあります。

まずは、会社名や屋号を決めなければいけません。

何をするのかということも重要ですが、その会社名を決めたら早々変えることができなくなりますので、決める時には慎重に決めなければいけません。

その会社名も重複していると紛らわしいものになりますし、効果的宣伝が打てないことも出てきます。

必ず重複の確認作業が必要になってくるわけです。

その後、会社のルールである定款の作成作業に移るわけですが、その前に法人実印を作らなければいけません。

なぜならば、でき上がりまで時間がかかりますし、定款には実印を押さなければいけません。

さらに、印鑑登録もしなければいけませんので、やらなければいけない処理が多数あるからなのです。

この法人実印には、印鑑書体として篆書体や古印体が選ばれることがほとんどです。

その理由としては、可読性も必要になりますが、それ以上に複製ができないようにするという目的があります。

印鑑はあまりに読めなければ意味はなくなります。

何を押しているかわからないからです。

ですが、容易に複製ができるようでは、自社の証明にはならなくもなります。

そこで、印鑑に適している書体である篆書体や古印が選ばれるというわけなのです。

しっかりしたものを作らなければいけない法人実印です。

書体なども吟味し、大きな契約など人前で使ったとしても、恥ずかしくない書体で彫りたいものなのです。

## 扱う大きさも違う法人銀行印と印鑑書体

銀行印は銀行と取引するために登録する大事な印鑑です。

他のものと混同しないように銀行ごとに変えておくことが、最近ではリスク分散に効果があると、盛んに訴えられるようになりました。

そのため、個人で数本の銀行印を持っている人も少なくありません。

そんな銀行印でも、法人銀行印は少し性格が違います。

個人とは違い扱っている金額もとても大きくなりますし、取引のレベルも違います。

目的にしても、仕入れなどの取引の支払い目的であったり、資産のプール場所にもなりますし、社員の給料を支払う窓口になることだってあるわけです。

こういった銀行印は、会社設立時に実印とともに作られることがほとんどになります。

個人印と違い、管理も厳重になるため、銀行ごとで分けることは多くはありませんが、リスクをしっかりと考えている会社では、複数にしているところもあります。

この銀行印には、実印と同じような形で彫られます。

外枠には、会や名などをいれて、内枠には銀行之印と入れることになり、実印との差別化を図るというわけです。

印鑑書体としては、実印と同様に篆書体や古印体が好まれます。

ですが、このままだと実印と間違えやすいこともあり、印材を変えてみたり、サイズを変えてみたりすることがあるわけです。

一か所に保管しているわけではなければ、こういった配慮も要りませんが、念には念をとということで区別がつくようにしておくと、無駄な実印の印影の流出を避けることができるのです。

法人認印に使われる印鑑書体は可読性が大切

法人の印鑑の中でも法人認印でもある角印は、よく使う印鑑になります。

領収書などにも押すことになりすし、請求書などでも押します。

個人の認印とは違うのが、受領書などで押す印鑑ではないということがあつたりします。

荷物が会社宛に来たとしても、会社の角印で受領の印にすることはなく、そういった場合には日付印などを使って押すことになってきます。

なんでも押しそうで、重要なものにしか使っていないのが法人認印になってくるのです。通常、個人の丸印とは違い角印で作られます。

文字の収まりがいいということもありますし、実印や銀行印と間違ったりしにくいということもあるわけです。

この場合、印鑑書体としては多くの種類が使われたりするわけですが、篆書体や古印体はその中でもスタンダードといわれます。

その理由として、縁が四角いということがあるわけです。

もともと印鑑用に考えられている、古印体はもちろんのこと、篆書体は直線が多く、角印との相性はとてもいいといえるわけです。

角印の場合には、可読性が大切になってきます。

押した相手に対して、全く読めないような角印は失礼なものでもあります。

誰が推したのかわからないようでは、認印としての効力はとても薄いわけですから、こういった印鑑書体が似合っているというわけなのです。

中にはとても凝った印鑑書体を用いた印鑑を使う会社もありますが、認識できないということは、その印鑑が本当にあっているかどうかはわからないということを認識しなければいけません。

実印や銀行印とは、性格が違う印なのです。

かわいい丸ゴシックの印鑑書体は使えるのだろうか

印鑑の中にはいろいろな印鑑書体が使われてきました。

世の中には、様々な書体があふれ、パソコンなどにも使われていますが、こういったものが印鑑に使われることは少ないものです。

その理由として、パソコンなどで主に使われているゴシック体などは、線の幅が一定で複製がしやすい書体であるということが挙げられます。

見た目には可愛い丸ゴシックなどもありますが、ゴシック体の共通する特徴である線は、どうしても幅が一定になってしまうわけです。

こういったことを気にしないようなものを使うなら、印鑑に用いても問題はありません。

認印などがこれにあたるわけですが、業務上の認印などに使ってしまうと、少しふまじめな印象を与えることもあります。

仕事の内容によっては、丸ゴシックなどは避け、行書体や楷書体のものを選ぶほうが無難です。

さらに、実印などにこういった書体を用いるのは、複製の危険性もあることながら、契約などに使う場合に相手に足しても不信感を覚えさせます。

個性を出すのは構いませんが、しっかりとした人でなければ、取引とは怖いものです。

インターネットなどでいろいろな意見が出たりもしますが、取引という性格上独りよがりでは何かをするのではなく、信用という言葉を考え、よく世の中を見て選択する必要もあるわけです。

印鑑を使って印影を残すということは、信用という部分も必要になってきます。

自分が信用されるためには、行動を律する必要は、いつの時代でも必要な要素になるのです。

明朝体は印鑑書体として不向きか

パソコンなどを日常から使っていると、いろいろな書体を見かけることが多くなります。

あまりに凝ったものもありますが、そういったものは表示できない恐れがあるため、図案化して写真のような形で載せていることもあります。

そういったデザイン性の高い書体もあれば、基本となる書体もあります。

それが、ゴシック体や明朝体になってきます。

明朝体などは新聞などでも使われ、普段から目にする機会の起き書体なのです。

ですが、あまり印鑑の書体としては使われません。

中国などではまれに使うこともあるのですが、日本では明朝体を印鑑書体として使うのは住所印などのゴム印にした場合です。

住所印などとした場合には、とても読みやすい文字になりますし、大きなインパクトを与えるわけでもなく、しっかりと情報を伝えられる大事な部分となってくれます。

そういった場合には、名前の部分にゴシック体などを用いたりすることで、社名をしっかりと伝えることができたりするわけです。

印鑑の場合には、実印や銀行印など格式をとるものの場合に、書道で使われる 6 つの書体に絞って作ります。

人目につくこともあるものですし、機械で作るときに使われやすい明朝体などよりも、複製がしにくく、腕がはっきり出てくる書体のほうが、相手にも伝わりますししっかりとした印影を残すこともできるからです。

印鑑書体も印刷やパソコンで使うフォントと同じように、ケースバイケースで使い分けなければいけません。

なんでも混同して使うことは、礼儀としても問題がありますし、使う側の信用も勝ち取れなかつたりするものなのです。

## 印鑑書体が同じで印影が同じ同型印の大きなリスク

印鑑書体というものは、印影を作り出す大事な存在です。

最近では印鑑というものが変に軽視される傾向があり、激安で販売されているような同型印が多いものでも銀行印として使ったり、実印として登録してみたりする人がいます。

こういったことをインターネットなどで広める人もいますが、それがいいことなのでしょうか。

印鑑書体は、本来手彫りで彫るものであり、そのおかげで同型印と呼ばれる同じ印影を残せるものができなくなります。

その結果、印影を見れば誰のものかわかるようになっているわけです。

そういった判断基準になるということが大事なことで、押した人間の真贋ができるために、その書面に書かれた署名も信用ができるのかどうかという審査にもつながります。

つまり同型印があるような印鑑では、こういった識別の機能は発揮できないといえるわけです。

こういった印影を持つ印鑑を信用取引が大切な銀行印に使うということは、それだけ自身の口座をリスクにさらしているということになります。

近年、副印票などを廃止する銀行や金融機関が増えました。



これは印影を記録したものさえあれば、違法であっても複製することは簡単であるということを示しています。

それだけ危険であるということを承知で、実印や銀行印として激安の印鑑を使っていくべきであって、これを他の人に勧められるものではないということです。

勧めた人は、誰かが被害にあっても責任をとるわけではありません。

しっかりとした判断で、リスクは回避することを考えていかなければいけないものなのです。

## 印鑑書体を感じられる日本人と文化

日本人はいろいろなものに判を押します。

その際に自信を持っていい印影だって思えることは、日本人ならではの感想なのかもしれません。

日本人は認印を含め、頻繁に印鑑を使います。

その印影を見て、綺麗に押せたと感嘆する時もあるはずです。

印鑑の文化はほかの国ではあまり発展しませんでした。

サインは書くものさえあればできるものであり、印鑑のように特別に用意するものもありません。

便利ではないかもしれませんが、そのサインである直筆署名と印鑑を組み合わせることによって、石橋をたたいて渡るほどの安全性を考えてきたわけですから。

日本人はそこまでおさまらず、印影の美しさなども考えたわけですから。

小さな印鑑文字の中にできの善し悪しを考え、今日はいまよく押せたとすることは、印影の美しさを感じ取っていることでもあります。

そんな小さな感嘆を感じ取っていくことも印鑑のいい面でもありますし、日本人の気質でもあるわけですから。

コンピュータ社会になって、印鑑の必要性も薄れてきたとも言われます。

サインですらあまりする機会が無くなり、認証の方法の是非というものが問われ始めてもいます。

指紋認証であったり網膜認証であったりと、生体認証の方法が考えだされてもいますが、日本人らしい小さな文化も、発展する時代の中で大切にしていっていきべきではないでしょうか。デジタルな合理性だけが世の中に必要なことではなく、アナログであっても続けていかなければいけないこともあるのです。